

## インドネシアの歌(8)

知らぬが仏編

### 本当は難しいインドネシア語の発音

インドネシア語は大方の日本人に「やさしい言語だ」と思われているのではないだろうか。赴任して数カ月で何とか日常の用事は曲がりなりにも通じていることだし...。インドネシアの歌を、その易しい(?)インドネシア語で無造作に歌っている。知る人ぞ知る。実は、結構おかしなインドネシア語で歌っているのだが、果たしてどれだけの人が気づいているやら?

難しい発音はnとng, uとe(曖昧母音)、rとlの区別、さらに語尾のhの発音(息の吐き出し)である。もう1つややこしいのがe[エ]とe[曖昧母音]でスペル上の区別が無い(以前はéとeで区別していた)ので、経験で憶えるしかない。スダ民謡にはこの曖昧母音のeを伸ばした発音が頻繁に出てくるので気が狂いそうになる。

誰でも知っている”Nona Manis”という歌の kumis hitam siapa yang punya...(黒いお髭の兄ちゃん誰の恋人なの)を kemis hitam...と曖昧母音でやると「黒い乞食ちゃん誰のもの」となる。が、幸いなるかな日本人は曖昧母音でも「ウ」と発音しがちなので、ここはしっかり歌えている。

スマトラ民謡の”Kapan Kapan”という歌は Kapan kapan kita berjumpa lagi (一体いつまたお会い出来るでしょうか)で歌い出すが、これを Kapang kapang kita...と語尾をngで歌うと「黴の生えた貝殻ちゃんいつまた逢えるでしょうか」という意味に。

“Tuhan”という名曲がある。Tuhan tempat aku berteduh, dimana aku berteduh dengan segala keluh(神よ,私の安らぎを得るところ、私の全ての悩みを鎮めるところ)。このkeluhをkeruh(いびきの意味)と巻き舌でやると、なんと最後の部分が「大いびきをかいて」という意味になる。そりゃ、大いびきをかいていれば別に神の前でなくても安らぎが得られか。

ラグラグ会やボーカルマニスもよく歌っている曲”Rayuan Pulau Kelapa”の場合。タイトルは「我が



愛する椰子の茂る島々」この rayuan が layuan と巻き舌ではなく日本人の「ラ」の発音に近くなると layu は「花などが萎れた」という意味である。「椰子の茂る島々」と歌うインドネシア讃歌が「萎れた椰子の島々」という甲歌になってしまう。

発音の悪い日本人には有り難い例もある。あの広い、多文化国家であるからには、1つの言葉があまねく行き渡ることはないはず。日本でも「ひ」と「し」、「す」と「し」、「せ」と「しえ」の区別が付き難い地方もあるくらいだから。さて、インドネシアの特に東の方の島々の歌手の歌で engkau を”エンカウ”と歌っていることに気づいている人もいるだろう。標準インドネシア語では”ンカウ”のような発音になる。また、マルク諸島の方では前置詞/接頭辞の ke は ka となっている。Kemana? を Kamana? と言っても決して間違いではない。同じくマルク地方では語尾の h が抜けることが多い。祖国を意味する Tanah Tumpah Darah が Tana Tumpa Dara と歌われる。これも間違いではない。

さらに辞書で単語を調べていると r と l の混同も頻繁に見られる。スダ語の中に cadel という単語。これがなんと「r と l をはっきり区別して発音できなく、r を l と発音をする」という意味であった。本当は舌が短く巻舌が出来ないという意味なのだろうが、万歳!我々日本人も堂々と市民権を主張しましょう。

ところで、我々ラグラグ会の中でも、Indonesia の発音は「インドネシア」ではなく「イ(エに近い)ンドネシア」であると言い出したことから、色々意見百出。決め手が無く結局、「いーじゃないか、えーじゃないか、よいよいよい!!」となっています。

Flamboyant(火炎樹)という歌には、葉が枯れてひらひらと落ちる、が、そこは大地の膝元、やがて再び芽が出て生き返るんだ(落ち葉を歎く必要はない)と roda dunia(輪廻転生)の精神が歌われている。歌の中ではこの光景を見たのが若い娘さんになっているので、失恋をしたのか、はたまた悟りを拓いたのか?

皆さん、発音が難しくても、歌は心で歌うもの。気にせず楽しく名曲に酔いしれましょう! (渡辺重視)